札幌大学総合論叢　第23号（2007年3月）

〈調査報告〉

中国山西省の南涅水石刻について

髙　瀬　奈津子

はじめに
1，山西省沁県南涅水石刻について
2，南涅水石刻の造像塔の内容
3，南涅水石刻の造像塔の特徴
おわりに

はじめに

2006年9月2日から10日まで，中国の山西省と陝西省西安市周辺の仏教関連遺跡・石刻文物の現地調査を行った。日本からは氣賀澤保規氏（明治大学教授）を代表に，江川式部氏（明治大学兼任講師），兼平充明氏（青山学院大学兼任講師），堀井裕之氏（明治大学文学部助手）と筆者の5名が参加し，中国では速水大氏（明治大学大学院，蘭州大学敦煌学研究所に留学中）と村井恭子氏（北京師範大学大学院）が同行した。

中国の北朝時代では，歴代王朝が熱心に仏教を受容したため，仏教の石窟寺院や単体の仏像の造像製作がさかんになった。北朝時代の山西省では，大同の雲崗石窟や太原の天龍山石窟のような大型の石窟があるが，そのほかに，山西東南部では小型の石窟も数多く造営されている[1]。山西省の省都太原，すなわち北朝時代の晋陽は，東魏・北斉朝の陪都であり，北斉高氏の政治的・軍事的拠点でもあった。また，晋陽と河南や河北をつなぐ主要な幹線道路は山西東南部を通っており，とくに東魏・北斉時代では，都の鄴と陪都の晋陽の往来が頻繁であり，この幹線道路に沿って仏教遺跡や仏教造像も多数残っている。筆者自身，北朝隋唐時代の仏教信仰活動の検討を研究テーマの一つとしており，山西省内の仏教遺跡や仏教石刻史料にはかねてより関心を寄せていた。そこで，太原以南の仏教遺跡・

石刻史料を実見し，その現状を確認して今後の研究に備えることを目的として，今回の調査に参加した。

筆者の主たる目的は，天龍山石窟，羊頭山石窟，高廟山石窟，童子寺など仏教遺跡の調査，太原市山西博物院や山西省芸術博物館，考古研究所，沁県南涅水石刻館の展示物や所蔵物の調査，青蓮寺などの寺廟の調査である。そのなかでも，沁県の南涅水石刻館の見学は最も期待したものの一つだった。

南涅水石刻のある沁県は山西省長治市に属し，省の東南部に位置する（地図参照）。私たちが南涅水石刻を調査・見学したのは，2006年9月6日である。午前8時15分に山西省の省都太原市のホテルを出発，専用バスに乗って9時に小店から高速道路に入り，約1時間半後に沁県インターをおりた。さらに走ること50分あまり，11時20分過ぎに石刻を陳列している南涅水石刻館に到着した。

じつは，筆者はかつて一度南涅水石刻館を訪問したことがある。1999年8月から9月に太原の天龍山石窟をはじめとする山西省東南部仏教石窟を調査した時に，太原市の博物館の関係者から紹介された。沁県から大量の仏教石刻が出土した，報告書も出ていないのでまだあまり知られていないが，とてもすばらしいものだからと薦められ，沁県にある南涅水石刻館に立ち寄り，館内にある造像塔などを見学した。その時は，造像塔の量が多いことと，それまで見てきた石窟の仏像とあまりにも様子が違うので，ただただ圧倒されて帰って来てしまった。今回，久しぶりに南涅水石刻と再会して，あの独特な造像塔をどう位置づけるべきか考えてみたいと思っていた。

本報告では，今回の調査で知りえた南涅水石刻の状況を示し，あわせて現時点での南涅水石刻についての自分の考えを整理したいと思う。

1，山西省沁県南涅水石刻について

1957年，沁県南涅水村の西北において穴蔵の中から760余の仏教石刻がまとまって発見された。これが南涅水石刻である。石刻の種類としては造像塔や造像碑，単独造像などがあるが，その大部分は砂岩でできており，紅砂岩のものもある。それらの中には，北魏永平3年（510）から北宋天聖9年（1031）までの銘文を持つものがあり，銘文や造像の様式から，北魏・東魏・北斉・隋・唐・北宋各時代のものが存在する。中でも，造像塔が最も多く400余件あり，その大部分が北魏，東魏，北斉時代のものである[2]。次いで，単体造像，造像碑などもある。その後も周辺から出土したものもあわせると，石刻造像は全部で2139件となる。しかも，これらはいずれも民間で造営したものであることから，当

時の庶民層による熱心な仏教信仰の状況をうかがうことができるだろう。また，こうした民間による造営という傾向は，沁県周辺の山西東南部の石窟造営にも同様に見られる。

沁県周辺は，晋陽から南に向かって上党をへて洛陽に至る道路と，東へ向かって鄴，邯鄲へ向かう道路が通っている。したがって，洛陽に都のあった北魏時代はもとより，晋陽と鄴との往来が頻繁だった東魏・北斉時代でも，当時の政治・文化の中心地域の影響を受けやすい場所にあったことが分かる。造像塔や石碑の紀年を見ても，いずれも北魏の洛陽遷都以降であり，沁県の造像活動自体が龍門石窟をはじめとする洛陽周辺での活動の影響を受けたものと考えられる。

南涅水で出土した石刻を収蔵するために南涅水石刻館（図1）が建てられ，そのほとんどがそこに保存，収蔵されているが，造像塔のうち一部の優品は，近年リニューアルオープンした太原市の山西博物院にも陳列されている。南涅水石刻館の内部は，1950年代に出土した石刻を陳列する7つの陳列室で構成される区域と，その後周辺で出土した単体造像などを陳列する陳列室などがある区域の，大きく二つの区域からなる。南涅水石刻の陳列館は，中庭を囲むように入口から向かって左手前より第1展室，第2展室，第3展室と並び，入口の正面に第4展室がある。向かって右側には奥より第5展室，第6展室，第7展室が設置されている。もう一つの区域では，中庭の向こう側に「碑碣拓片展覧廳」が建設されている。石刻館の周辺は，99年に訪問した時よりも整備され，格段に訪問しやすくなった。ところが最近になって，南涅水石刻館は盗難に遭い，造像塔など数点が盗まれてしまい（図2），それまでの館長は管理の不備の責任から更迭されたという。私たちが訪問した時には，若い館長が新たに赴任したばかりだった。

1950年代に出土した石刻造像を陳列する陳列室は全部で7つである。第1展室はすべ

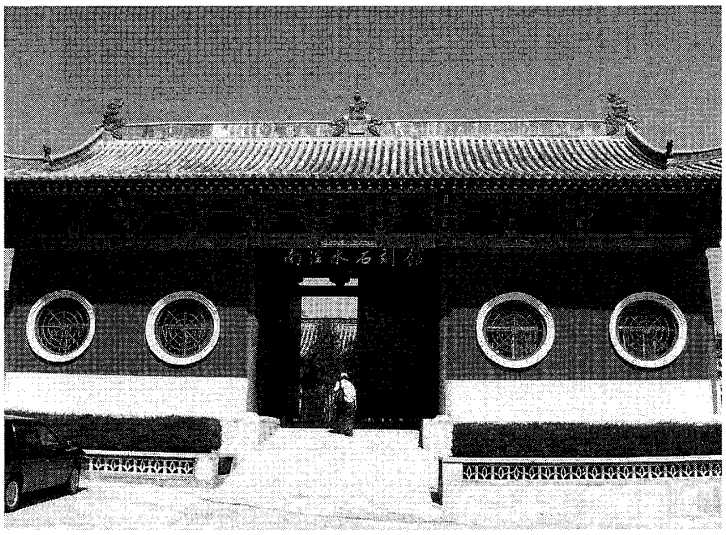


図1　南涅水石刻館

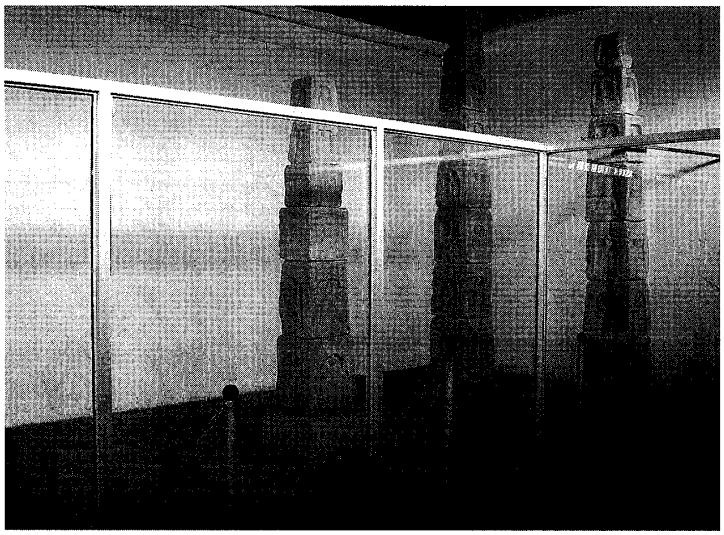


図2　南涅水第6展室（むかって左が持ち去られている）

て単体造像が陳列されている。第2展室は，110件の造像石を7つずつ15基の塔に積み上げた造像塔（図3）と2件の造像碑がある。この部屋の造像塔は北魏晩期から北斉時代の様式をもつものである。第2展室のものに限らず，南涅水の造像塔には，「阿育王施土縁」「白馬吻足」「二仏並坐」といった本生譚から取られた題材が多く，4面に仏龕が開かれている。他の地方から出土した造像塔の様式にならえば，南涅水の造像塔も一つ一つの石を積み重ねて大きな塔を形成していたはずである。ただ，出土した時点では，すべて二つの穴蔵にバラバラに放り込まれた状態で見つかったため，現時点でも適当に積み上げられて

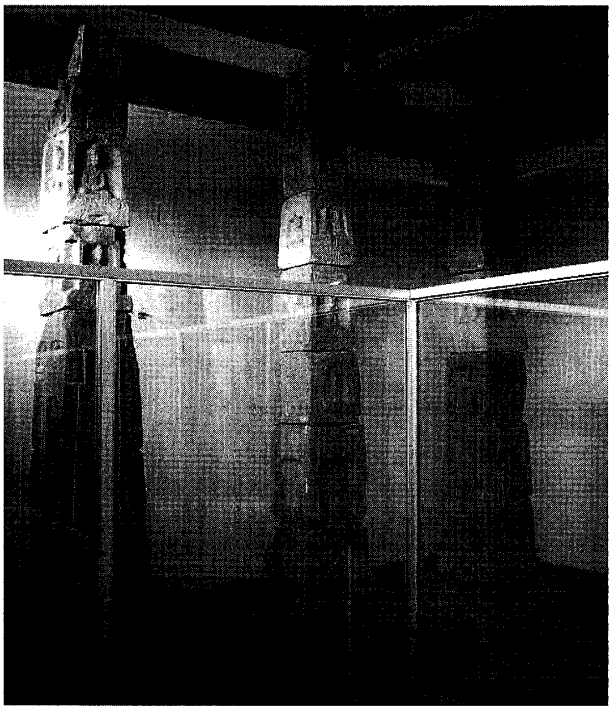


図3　南涅水石刻館　第2展室

いる。造像碑は入口より向かって左に北魏「神亀3年（520）□月」の石碑，右に「正光2年（521）8月9日仏弟子22人…」の石碑である。第3展室は単体造像が17体あり，北魏から唐宋代のものである。第4展室は北魏晩期から北斉時代の様式をもつ106件，16基の造像塔（図4）と，2件の造像碑がある。造像碑は一つが北魏の「神亀3年（520）」の紀年をもつ石碑で，もう一つが唐の「咸通9年（868）5月10日沙門宗…」とある石碑である。第5展室は16体の単体仏像が並び，北斉から唐代のものである。これらも南涅水村で二つの穴の中にバラバラに入っていた。ここに展示されている迦葉像（図5）は2m65cmあり，南涅水石刻の仏像の中で最も大きいものである。同じ部屋には，一緒に出土した阿難像も陳列されているが，この2体とセットであるはずの釈迦如来像は見つかっていない。第6展室には，北魏から東魏までの造像塔11基と北斉の紀年を持つ造像碑4件がある。造像塔にはところどころなくなっているところがあり，本来は13基あったはずである。また，塔の個数も全部で96個あるはずが，数えてみたところ74個しかなかった。北斉の造像碑は，向かって左側手前より「武平6年（548）□月23日」と「皇建2年（561）4月8日」の石碑が2件，向かって右側手前より「天保6年（555）4月15日」と「武平6年5月8日」の石碑が2件，計4件である。左側の「武平6年」の石碑は上方に仏龕が開かれ，碑文には尊像は観音像とある。第7展室は閉鎖中で，中に入ることができなかった。もう一つの区域は「碑碣拓片展覧廳」であり，室内には単体造像が13体，経幢2件，仏頭1個が置かれている。

次に，南涅水石刻の中で最も多く出土した造像塔について見ていきたい。

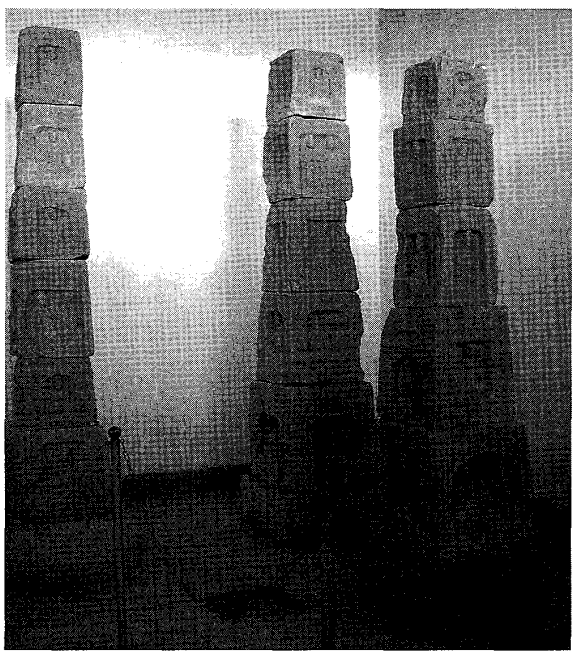


図4　南涅水石刻館　第4展室

図5　南涅水石刻館　第5展室　迦葉像

2，南涅水石刻の造像塔の内容

南涅水石刻の造像塔は，4面に仏龕が開かれ，その中に造像が彫刻されている。一つの造像石の大きさは，大きいもので81 × 64 × 70 cm，小さいもので22 × 25 × 28 cmである。それを5つあるいは7つ積み上げ，5層あるいは7層の仏塔としている。四面体の造像塔は，中国では南北朝から隋唐時代にさかんに作られている。塔座・塔身から塔頂まで一つの石で彫りだしたものと，南涅水のように1層を一つの石で作ってこれを積み上げ，3層，5層，7層の塔にしているものとがある。南涅水石刻の造像塔は後者の積み上げ式に該当する。ただし，先述したように，南涅水石刻はいずれもバラバラに出土したために，石刻館にあるものは石の形状や図像や造像の内容から推測して適当に組み合わせて積み上げたものであり，陳列してある通りにセットになって出てきたわけではない。

造像石はおおむね北魏から北斉時代に造られたが，『山西考古四十年』の記述によると，おおよそ4期に分けられる[3]。第1期は北魏時代の造像であるが，さらに前・後期に分けられる。第1期前期は，宣武帝永平2年（509）から孝明帝熙平2年（517）まで，後期は神亀2年（519）から北魏末までである。前期のものは，4面のいずれも上部に仏龕を開き，その下に願文を刻む。上部の仏龕は千仏龕形式で，内側は，一仏，一仏二菩薩，二仏，一交脚菩薩を造る。仏龕が小さいため，内側の仏像も小型である。後期は前期よりも大規模

に造像された時期である。長方形をした単体のものから方形の大きなものに発展し，数個で組み合わせたものになる。造像様式や図像も複雑，多様なものとなる。

第２期は北魏末期の永熙２年（533）から北斉初の天保元年（550）である。造像は一仏，一仏二菩薩が中心である。仏龕は長方形，凸形，円拱形などを造る。龕外には線刻の龕楣，帷幄，蓮華，巻き草などを造り，さらに鳥や獣，飛天，火焔紋，龍首，蓮華，菩提樹などのレリーフを造る。

第３期は北斉の天保元年（550）から開皇初で，南涅水石刻の２回目のピークである。造像は一仏，一仏二菩薩が中心となり，二仏並坐する釈迦多宝仏説法や思惟菩薩などが減少し，仏龕の装飾にも変化が見られる。第３期の後の方になると，一仏二弟子二菩薩が造られるようになる。また，八面体の造像石も出現する。

第４期は隋唐時代で，造像石は最終段階を迎え，数量も比較的少なくなる。造像は一仏二弟子，一仏二力士，一仏二弟子二菩薩が中心である。仏龕の多くが円拱形，尖拱形，円拱形龕楣となる。

南涅水石刻の造像塔で最も多いのは，定光仏授記（アショカ施土因縁と混淆した図像），二仏並坐像，菩薩半跏思惟像（図６），菩薩交脚像の組み合わせである。これは釈迦を現在仏とする過去・現在・未来の三世仏の組み合わせを意味している。仏龕の周囲に千仏を彫刻するものも多い。三世仏は，釈迦の説いた仏法の偉大さと，その仏法が過去，現在，未来へと続く永遠性を示している。三世仏や千仏をともに礼拝対象とする仏教信仰は北魏時代に広く流布した。北魏時代の仏教信仰は，釈迦・弥勒を中心とする過去仏から未来仏

図６　菩薩半跏思惟像（『山西石刻造像芸術集萃』（太原，山西科学技術出版社，2005年より）

へと続く仏法の継承である。こうした北魏時代の仏教信仰が，東魏・北斉時代になっても南涅水の造像塔に受け継がれていたことになる。そして，同様の傾向は，山西東南部の仏教石窟にも見られることであり[4]，造像の表現の仕方は違っても，南涅水と周辺地域との信仰のつながりが分かる。そのほかにも，愛馬別離図，釈迦苦行像，初転法輪像，涅槃像などの仏伝の場面や，騎象菩薩像，維摩詰像（図7），文殊菩薩像などが見られる。

図7　維摩詰像

3，南涅水石刻の造像塔の特徴

次に，南涅水石刻の造像塔について，その形式や造像様式，図像の特徴から，どのようなことが読み取れるかを考えてみたい。

造像塔は，とくに甘粛と山西でよく見られる。南涅水のような積み上げ式の塔像は甘粛にも作例があり，石松日奈子氏は山西南部と甘粛地方とのつながりについて指摘している[5]。甘粛省の庄浪水洛城から出土した卜氏造像塔（図8）は北魏時代に造られ，南涅水と同じ積み上げ式の5層の造像塔である[6]。この塔の造像内容を見ると，定光仏授記，二仏並坐像，倚坐弥勒仏像，菩薩立像，菩薩交脚像などがあり，そのほかにアショカ施土因縁，愛馬別離図，涅槃像などの仏伝の場面も彫刻されている。造像の内容を見ると，南涅水の造像塔と重なる部分は多い。

また，南涅水の造像塔の特色として挙げられるのは，二仏並坐と千仏表現がかなり多いことである。石松氏は，南涅水を含む山西南部では，二仏並坐と千仏表現が好まれ，その背景として，多仏多尊崇拝という庶民的な仏教信仰があること，また図像や着衣などの造

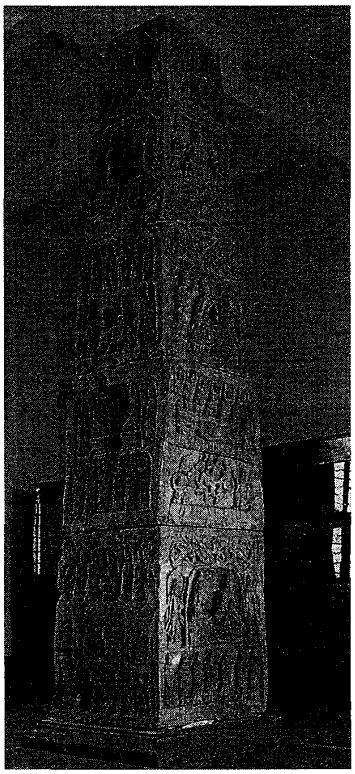


図８　甘粛庄浪の北魏ト氏造像塔（張宝璽著『甘粛仏教石刻造像』蘭州，甘粛人民美術出版社，2001 年より）

像様式に厳格さが欠け，雑多な図像が混入している点にも，同様の傾向が読み取れるとし，こうした傾向が同時期の陝西地方にも見られ，陝西東部から山西南部にかけて，共通する信仰と造像の地盤が存在したのではないかと指摘する[7]。

さらに，造像石の仏龕周辺に彫刻された図像について，八木春生氏は次のように述べる。南涅水の造像塔には，楣拱額内中央に円花文様，その左右に旋回文を刻む例があるが，これと類似した文様が，河南省の鞏県石窟第五窟北壁の楣拱額内にも線刻されていることから，南涅水の沁県と河南省の鞏県石窟の間に何らかの交流があったのではないかと[8]。

その一方で八木氏は，沁県のような山西地方で漢民族の伝統図像が比較的好まれた地域にしても，他の地域と比較すると集中して伝統図像が使用されることはなく，「伝統図像が仏教美術にオブラートに包まれていない点では，河南北部より関中地区に近いといえる」と述べている[9]。石松氏が図像や造像様式から沁県の仏教信仰の傾向を陝西東部と共通する部分があると述べた点や，そもそも造像塔自体が甘粛地方に多い点などと考え合わせると，南涅水石刻は西方の陝西や甘粛地方とのつながりも強い，という特徴が浮かびあがる。山西東南部の仏教石刻については，太行山脈をはさんだ河北や河南といった東方や南方との結びつきを考えがちであった。しかし，南涅水の事例から，山西東南部の仏教信仰についてもっと西方の地域との交流も探求すべきであろう。

おわりに

今回の調査で現在の状況を確認した山西省内の仏教遺跡・石刻史料のうち，沁県の南涅水石刻について報告した。2005年の山東・河北・河南省の仏教石刻史料の調査とあわせ，華北東部にある北朝隋唐時代の仏教石刻史料について，地域ごとの特色と地域を越えて同時期で共通するものとが，わずかに見えてきたように思う。

南涅水石刻についていえば，1999年に見学したときには同じ山西東南部の仏教造像であっても周辺の仏教石窟との表現形式の違いに戸惑ったが，今回の調査で沁県に近い羊頭山石窟も見学することができたおかげで，現在では，石窟と造像塔という表現形式の違いはあっても，むしろ周辺の仏教石窟の造像と類似している部分が多いのではないかと思っている。他方で，先述したように南涅水石刻の北朝時代の造像には，西方の陝西や甘粛地域とつながる部分もあることが分かった。南涅水石刻も含めて北朝時代の山西東南部の仏教信仰の位置づけ，ひいては山西東南部の北朝時代の政治的・社会的位置づけについては，今後の課題としたい。

注

1　山西東南部の石窟については，李裕群「山西北朝時期小型石窟的考察與研究」（巫鴻主編『漢唐之間的宗教藝術與考古』北京，文物出版社，2000年）が網羅的に扱っている。筆者も以前に調査をもとに整理したことがある。拙稿「北朝末山西東南部の仏教石窟」（『明大アジア史論集』第5号，2000年）。

2　これまで南涅水石刻について報告・紹介したのは，以下のものである。

陳勇「山西沁県発現了一批石刻造像」（『文物』1959－3）

郭同徳「山西沁県南涅水的北魏石刻造像」（『文物』1979－3）

山西省考古研究所編『山西考古四十年』（太原，山西人民出版社，1994年）313～318頁

『山西石刻造像芸術集萃』（太原，山西科学技術出版社，2005年）51～68頁

しかし残念ながら，いまだ詳細な調査報告書は出されていない。

3　前掲『山西考古四十年』，313～317頁を参照。

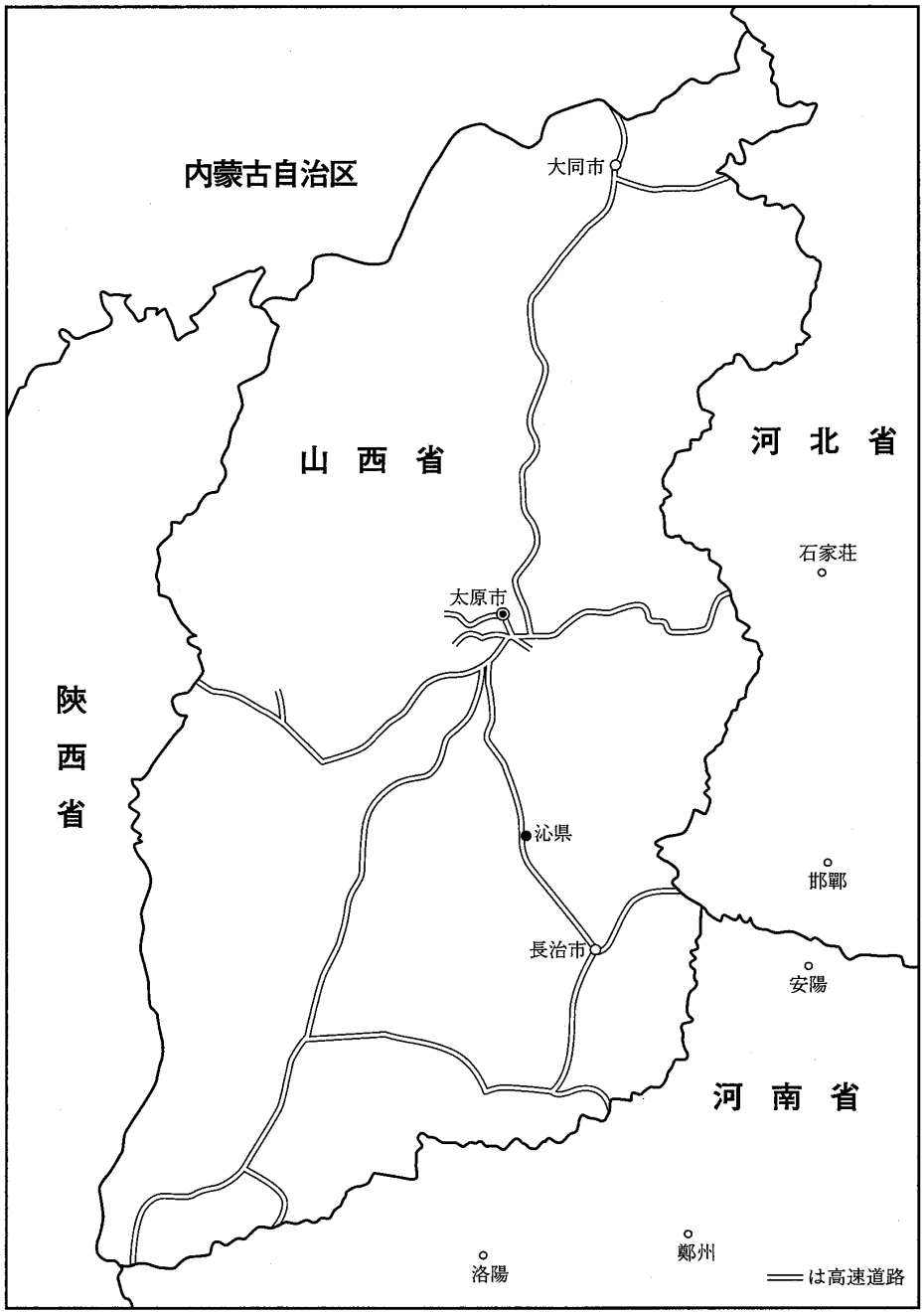
4　前掲拙稿，48頁を参照。

5　石松日奈子「北魏時代の地方造像と民間造像―仏教造像の普及―」（『北魏仏教造像史の研究』ブリュッケ，2005年），185頁を参照。

6　庄浪卜氏造像塔については，胡同慶・安忠義著『仏教芸術』（遥望星宿―甘粛考古文化叢書，蘭州，敦煌文芸出版社，2004年），および張宝璽著『甘粛仏教石刻造像』（蘭州，甘粛人民美術出版社，2001年）を参照。

7　石松氏前掲論文，186頁を参照。

8　八木春生「北魏時代後期の仏（道）教造像に見られる漢民族の伝統図像について」（『佛教藝術』245, 1999年。後に同氏著『中国美術と漢民族化―北魏時代後期を中心として―』（法藏館，2004年）に所収），30頁を参照。

9　八木氏前掲論文，33頁を参照。

附記　本報告は，平成18年度科学研究費補助金（若手研究B「北朝隋唐期における仏教教団の宗教活動と中国の国家及び社会に対する影響の研究」）による研究成果の一部である。